

漁村集落における街路特性の変遷に関する研究 その2： 放生津地区における街路利用の変化と街路特性の考察

街路利用 歴史的変遷 必要行動
任意行動 滞留行動 移動行動

正会員 ○北野まつ葉*1 正会員 藪谷祐介*2
同 有原千尋*3 同 北島陽貴*3
同 谷内遥香*4 準会員 重山隼人*5

1. 研究の背景と目的

前稿(その1)では、放生津地区における街路特性を把握するにあたり、生業の変遷を概観し、街路空間の変容の整理を行った。本稿では、住民へのヒアリング調査から街路ごとの滞留行動と移動行動の変化を明らかにし、前稿の調査結果と併せて街路特性の変遷を考察する。

2. 調査方法

旧越中浜往来を含めた三本の街路沿いの住民を対象に、滞留行動と移動行動に関するヒアリング調査を行った。調査範囲は図1に、ヒアリングの概要は表1に示す。ヒアリングでは、放生津地区の地図上に滞留行動と移動行動を記入してもらった。街路利用へ大きな影響を与えたと考えられるHOPE計画が実施された1990年の前後30年間の街路利用の調査を行った。回答者の属性の傾向から、1960-1990は子供の行動、1991-2021年は高齢層の行動が多くなっている。

街路利用はヤングールによって定義された屋外活動の三つの型¹⁾のうちの必要行動、任意行動に分類し、三本の街路特性の分析を行う。必要行動は家事や通勤通学、買い物など義務的な活動を含み、屋外環境の影響をあまり受けない行動である。任意行動は散歩や談話、日光浴など時間や場所が許すときに参加でき、屋外の物的条件に大きく影響を受ける行動である。

3. 滞留行動(表2)

3-1 越中浜往来

1960-1990年は越中浜往来(以下、浜往来)近辺の神社や図書館の敷地内が子供の遊び場として利用されていた。当時は現在ほど自動車が普及しておらず、子供たちの遊び場は街路まで拡張していた。1991-2021年は住宅の玄関や軒先が近隣住民との談話の場として利用されている。

3-2 内川沿い

1960-1990年は洗濯やゴミ捨て、除雪など、生活の必要行動で内川が利用され、HOPE計画以前の写真からは洗濯物を干す様子も確認できた。また、内川沿い(北側)は漁師が多く居住する浜往来の裏側にあたるため、漁網や仕掛けの準備など、漁業に関連する必要行動が多く行われた。近隣住民との夕涼みや川遊びなどの任意行動は内

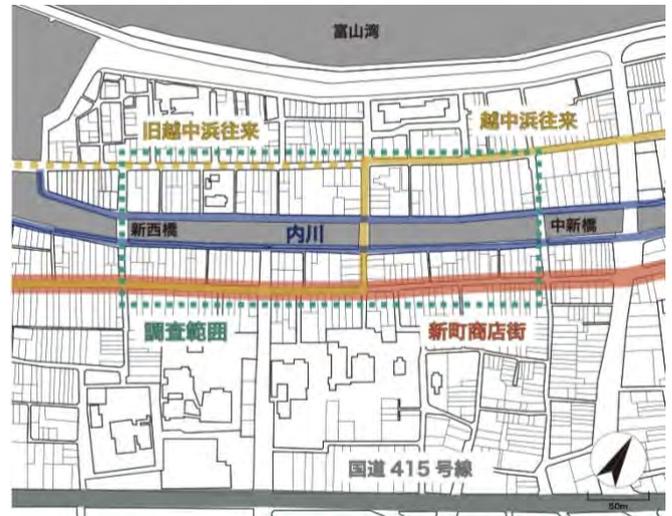


図1 調査範囲

表1 ヒアリング概要

調査目的	住民の街路利用の実態を把握し、街路特性を考察する	
対象者	「越中浜往来と内川沿い」、「内川沿いと新町商店街」の二本の街路に接道する住宅の住民	
調査項目	属性	性別/年齢/職業/居住年数
	街路利用	滞留行動
	街路利用の変化	移動手段/移動経路 変化の内容と要因
調査期間	2021年7月22日-7月31日	
回答数(回答率)	21(39.6%) 53件に訪問し留守または回答を断られた人を除く21人の回答を得た。	

表2 街路空間と行動の分類ごとの滞留行動

街路空間	行動分類	1960-1990	1991-2021
越中浜往来	必要行動	-	-
	任意行動	遊び	談話
内川沿い(北側)	必要行動	漁作業、洗濯、ゴミ捨て	-
	任意行動	川遊び	談話
内川沿い(南側)	必要行動	洗濯、除雪、ゴミ捨て	漁作業、洗濯物干し、(草むしり)
	任意行動	川遊び、夕涼み、梅干し	-
新町商店街	必要行動	店の経営、買い物	店の経営、(草むしり)
	任意行動	遊び	談話

川沿い(南側)で見られた。内川沿い(北側)で多く見られた漁作業は、1991-2021年には内川沿い(南側)でも見られ、理容室のタオルを街路に干すなど、現在は生業に関する必要行動が中心となっている。また、漁師の出港後には、内川沿いの草むしりを行う人がいる。

3-3 新町商店街

1960-1990年は買い物や店の経営など商業関連の必要行

動が多く見られた。また浜往来と同様に、商店街近辺の社寺仏閣の境内は子供たちの遊び場であった。当時の大人たちは仕事で忙しく、余暇的に過ごす習慣があまり無かったため、任意行動は子供の行動が多かった。1991-2021年は、営業を続ける店舗は数件あるものの、買い物を行う人は減少した。閉業した店舗を住宅へ改築している人が多く存在し、浜往来と同様に、玄関や軒先、車庫での任意行動が見られる。

4. 移動行動 (図2)

4-1 自動車による必要行動

1960-1990年は、浜往来に漁業従事者や高岡、富山などの市街地で働く人が比較的多く住み、荷物の運搬や郊外への通勤のため、自動車移動を行う様子が伺えた。1991-2021年は自動車移動が著しく増加し、通勤だけでなく買い物の際の自動車移動も見られる。また、浜往来、国道415号線など、東西軸の幹線道路へ向かうための南北移動の増加が顕著である。自宅の内川側に設けられた車庫に駐車する際の内川沿いの移動が少し見られる。

4-2 自動車による任意行動

自動車による任意行動は、あまり見られなかった。

4-3 徒歩による必要行動

1960-1990年は商店街に日常生活の中で必要な機能のほとんどが揃い、商店街で買い物を済ませる人が多かった。そのため、住宅から徒歩圏内にある商店街にかけて徒歩移動が集中していた。1991-2021年は、徒歩移動の著しい減少が明らかとなった。徒歩移動は内川以南でのみ確認でき、徒歩での買い物の場が商店街から国道415号線沿いのスーパーへと移り変わったことが明らかとなった。

4-4 徒歩による任意行動

1960-1990年の子供たちの遊び場は、町中に点在する社寺仏閣をはじめ、内川や海岸沿いの堤防、砂浜など、広範囲に分布したため、調査範囲全域で徒歩移動が見られた。一方、1991-2021年では、自動車の少ない内川沿いで子供や犬を連れて散歩する様子が見られるなど、内川沿いの徒歩移動の増加傾向が明らかとなった。また住民からは、観光客の通行が頻繁であることが指摘された。また、任意行動における徒歩移動でのみ、南北に通る小路の移動が見られる。

5. 街路特性の考察

地区内で完結していた生活機能の衰退や分散、作業場所の減少により、街路空間での滞留行動の減少と通過行動の増加が明らかとなった。居住空間である浜往来では、任意行動による住民同士のおつきあいが継続して行われている。内川沿いはHOPE計画以前と同様に漁作業や洗濯物干しが行われ、私的な街路特性が強い傾向にあるが、HOPE計画による親水空間やくつろぎの場の整備により任意行動が増加した。また観光客の増加などによる公共性の向上から、公私の街路利用の混在が見られる。かつて作業空間とされた内川沿いは、草むしりが行われるなど空間マネジメントの対象へと変容し、住民意識にも変化が生じていることが考えられる。商業空間であった商店街では、生業が衰退、分散した結果、生活空間へと変容し、任意行動による住民同士の交流が増加した。

参考文献

- 1) 著ヤン・ゲール,訳北原理雄: 建物のあいだのアクティビティ-鹿島出版会,2011年

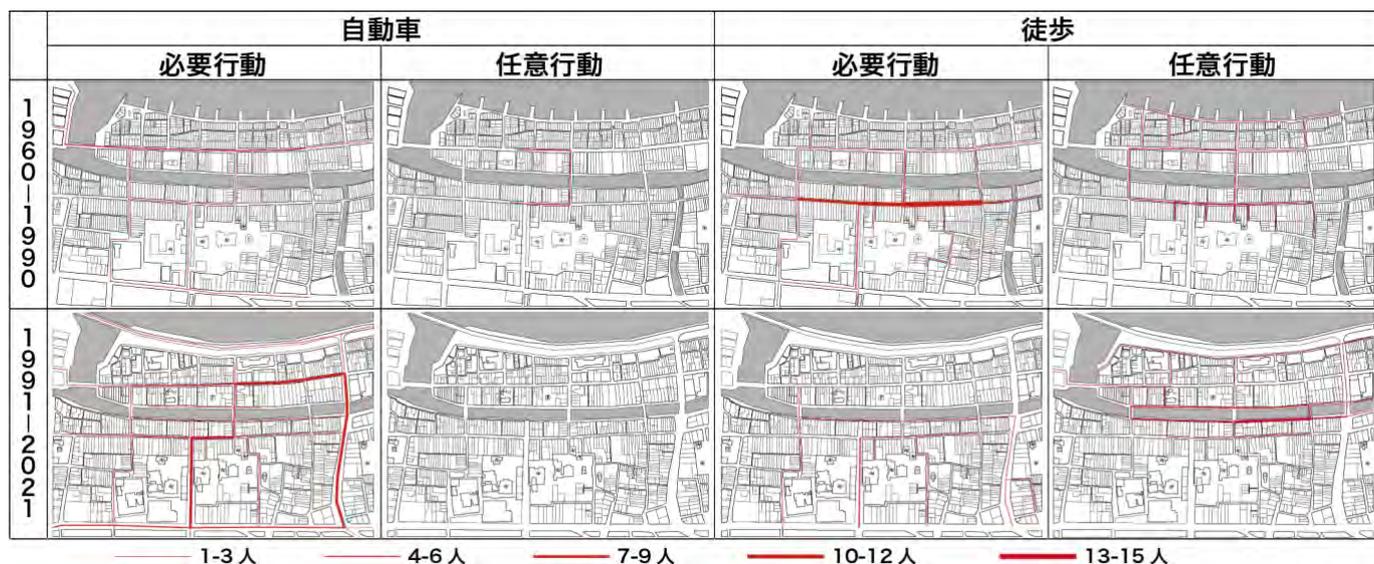


図2 移動行動の分類

*1 グリーンノートレーベル株式会社
 *2 富山大学学術研究芸術文化学系講師・博士 (デザイン学)
 *3 富山大学大学院芸術文化学研究科大学院生
 *4 株式会社トミソー
 *5 富山大学芸術文化学部 学部生

*1 Green Note Label Inc.
 *2 Lecturer, Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama, Doctor of Design
 *3 Students, Graduate School of Art and Design, Univ. of Toyama
 *4 Tomiso Corporation
 *5 Undergraduate, Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama